

中国語母語話者の初対面会話における話題転換研究 —話題転換のプロセスと話題転換方略を中心に—	
楊 虹	国際日本学専攻
期間	2006年2月10日～2月23日
場所	中国
施設	復旦大学、上海市図書館、北京大学、中国国家図書館

内容報告

1. 海外調査研究の必要性

1.1 会話データの収集

中国人日本語学習者の話し方については、日本語母語話者から、「話し方が唐突だ」というマイナスの評価が聞かれる。その一方で、中国語母語話者である筆者は、日本語母語話者の「話は変わりますが」のような話題を変える時によく用いられることばに違和感を覚える。中日母語話者双方がお互いにこのような違和感を抱き続けられれば、円滑なコミュニケーションに支障をきたし、より深い人間関係の構築が難しくなることも予想されよう。このような問題意識から、修士論文（詳細は4.2をご参照）では、中日接触場面の初対面の会話を、話題転換に焦点をあて、分析を行った。

分析の結果、接触場面において、中国人日本語学習者には、日本語母語話者と異なる傾向が見られた。例えば、日本語母語話者は会話参加者双方により話題の終了について合意した後に新規話題を導入するが、中国人日本語学習者は話題の終了を明示的に表示しないで新規話題の導入を行う場面が多く見られた(楊2005)。これが、日本語母語話者にとっては、唐突な話題転換と感じ、困惑する一因となっていることが考えられる。

では、接触場面における中国人日本語学習者と日本語母語話者の話題転換行動の違いをどのように解釈すればよいだろうか。日本語母語話者の言語調整によるものか、中国人学習者の日本語能力の制限によるものか、それとも、中日母語話者双方の持っている会話スタイルが異なることが影響しているのだろうか。これらの要素はいずれも無関係ではないことが予測できよう。しかし、接触場面のデータだけでは、どの要因が

より大きく関わっているか、またどのように影響を与えているかなど、問題点の特定ができない。接触場面で見られた中日母語話者の異なる話題転換行動を的確に解釈し、その要因を究明するには、中国語母語場面での話題転換の特徴を明らかにする必要がある。

しかし、管見の限り、中国語母語場面における話題転換を扱った研究はまだ行われていない。そのため、中国語母語場面での会話を収集し、分析することが必要である。その際、日本に滞在する中国人留学生を対象として日本国内で収集する場合は、中国人留学生の日本での生活や、第二言語としての日本語に接する時間の長さ等による影響が考えられる。これらの影響を排除するためには、中国国内でデータ収集を行うほうが望ましい。そこで、本研究のデータ収集は中国国内で行うことが必要と考える。

また、中国では、地域により文化差もあるため、今回は、中国の北部と南部にある大学を一校ずつ調査地とし、初対面の会話を収集することにした。

1.2 文献調査

博士論文の執筆において、上記のデータ収集のほか、中国語母語話者による話題転換に関する研究及び中国語母語話者を対象とした語用論の観点から、談話分析の手法を用いた研究に関する文献を踏まえる必要がある。そのほか、中国語母語話者が参加する異文化間コミュニケーションに関する研究や、中日間の対照研究といった分野の先行研究についても、把握する必要がある。これらの文献資料は、日本国内では入手が困難な場合もあり、中国国内での調査

が必要と思われる。そのため、今回の海外調査では、データ収集と同時に、中国国内における話題転換の研究並びに語用論、談話分析、異文化コミュニケーションの研究動向を把握するための文献調査も合わせて実施する。

2. 海外調査概要

2.1 データ収集

中国語母語話者による初対面の二者間会話を収集することを目的とし、中国の北部と南部にある大学（北京大学・復旦大学）を調査地として、当該大学の先生の紹介などを通して、大学生に協力してもらい、初対面同士のペアを組み、計12組の会話データを収集することができた。また、会話終了後に、会話に関するアンケート調査を実施し、初対面会話に対する中国語母語話者の意識調査も合わせて行った。

2.2 文献調査

中国国内における語用論、談話分析及び異文化コミュニケーションの研究動向、話題転換に関する研究の動向を調査することを目的として、上記両大学の図書館及び上海図書館、国家図書館（北京）で、学会誌・書籍および言語文化関係の博士論文の調査を行った。

3. 本海外調査研究の結果

3.1 データ収集・パイロット分析の結果

今回中国で収集した12組のデータについて、パイロット分析の結果、中国語母語場面の話題転換には、接触場面及び日本語母語場面とは異なる特徴が見られた。

中国語母語場面のデータについてみると、話題転換における終了のプロセスがきわめて短く、場合によっては、先行話題の終了なく次の話題が導入されるものも見られた。

下記の会話例^{*1}はその一例である。会話例1では、235C13で、話題転換が起こっている。それまでの話題「外の景色」から一変して、「部屋のにおい」という話題に転換された。ここでは、次の話題の導入者C13からは、先行話題についての相手の意見に相づちを打つなどして、話題の終了を確認する行為が見られない。

会話例1 外の景色⇒部屋の臭い

	【中国語】	【日本語訳】
233C13	啊, 其实你看要不这么响的话, 晚上还可以看看夜景, 灯光璀璨的。	あー、もしこんなにうるさくなければ、夜はライトアップされ、きらきらとした夜景も見られますよね。
234C14	是啊, 那会儿跟同学说么, 说北京的那个晚上跟白天似的。路灯那么亮, 然后就是, 反正我觉得跟白天没什么区别。就是人少点儿。	そうですね。この前、大学時代の友達に会って、北京の夜はまるで昼間みたいねって話した。街路の灯が明るくて、それから、とにかく昼間とほとんど変わらないと思います。ただし人通りがちょっと少ないですね。
→235C13	诶, 你们宿舍还有甲醛味吗?	え、部屋にはまだホルマリンの臭いがしますか?
236C14	(1)好像没了, 以下略	(1)消えたようです。(以下略)

このような会話のやり取りは日本語母語話者から見れば、かなり違和感を覚えるのではないかと予想されるが、中国語母語話者同士の会話では、しばしば観察される。会話例2では、C23とC24は「体育の授業で何を選んだか」について話しており、76C23で話題転換がおこっている。ここでも、新しい話題を導入する前に、先行話題を終了へと導く表現は見られない。このような話題転換は唐突な印象を与えてしまう可能性が考えられよう。

会話例2 体育の選択科目⇒C24の出身地

	【中国語】	【日本語訳】
72C23	对啊。我从初三毕业就开始击剑, 然后那时候在广州 (以下略)	そうですね。私は中学校卒業してからずっとフェンシングをやりたくて、えっと当時は広州では (以下略)
	(中略)	
75C24	我一开始, 我一开始学击剑的时候人特别多, 当时我不剩几个点, 剩下一个跆拳道, 结果把所有点, 剩下所有点都压上去, 结果还是没有。现在我就心定了, 坚决不去了。我现在办一张卡, 每次到那边去玩就算了。	私は、最初からフェンシングはあまりにも人気、自分の点数を考えて、すべてテコンドウにかけたけど、やはりだめでした。今はもうすっかりあきらめました。あそこは、カードを作って、遊びに行くだけのものと思っています。
→76C23	然后, 江苏, 你是南京的吗?	それから、江蘇、あなたは南京の出身ですか。
77C24	不是, 常州你知道吗?	いいえ。常州を知っていますか。

一方、これまでに収集した日本語の母語話者同士

の話題転換には、下記会話例3に見られるように、269J2から277J2まで*2、お互いに相手の発話をくり返したり、相づちを打ったりして、話題を終了へと徐々に導かせていくプロセスが見られた。

会話例3 白衣の学生⇒身分証明書の提示

- 266J1 いますよね。なんか私さっき、生協の販売で驚いたんですけど、白衣とか売っているんじゃないですか。
- 中略
- 271J2 結構着ている人とかいて、あ、格好いい。
- 272J1 格好いいですね。
- 273J2 格好いいですね。
- 274J1 ちょっと着て歩いてみたい（笑いながら）。
- 275J2 歩いてみたいと思います。
- 276J1 歩いてみたいですね。ばれないかなー。[hhhh]
- 277J2 [hhhh うん]
- 278J1 あれですね、私結構ここ、最近までなんかちょっと家の近くで勉強できるとこ探してて、最近また来るようになったんですけど。門のところで身分証明書を出さないといけないじゃないですか。

このように、中日母語話者の母語場面の会話の対照研究から多くの示唆が得られることが予想される。今後は、中国語母語場面の話題転換における、1. 話題開始及び話題終了に見られる言語表現、2. 話題転換のプロセス、という二点を明らかにするため、量的・質的に分析する予定である。そしてさらに、これまで明らかにした日本語母語話者の話題転換行動と比較し、両者の異同を分析する予定である。

3.2 文献調査の結果

中国国内の日本語研究の学会誌等を調査した結果、中国語を対象とする研究で、話題に関するものは、1. 統語論の観点から分析するものだけであり、談話の観点からのものは見当たらないこと、2. 話題転換に頻繁に出現する談話標識についての博士論文も見られるが、分析の対象は会話資料ではなく、小説などの書物からの引用であること、が明らかになった。

また、語用論や談話分析などの分野に関しては、1. 語彙・統語の研究が中心で、談話・会話の研究が見当たらないこと、2. 海外の談話研究、主に語用論研究の紹介が近年行われるようになったこと、3. 極わずかの中日比較文化と銘打っている論文も、自らの滞日経験からの観察、先行研究の引用などに基づくもので、実証的研究が見当たらないこと、が明らかになった。また、分析対象は、先行研究や小説、作例などで、生の

会話データを扱う研究はほとんど見当たらない。

4. 博士論文における本海外調査研究の位置づけ

4.1 博士論文の構想

博士論文は、中日接触場面での会話における話題転換を、参加者それぞれの母語でのコミュニケーション・スタイルを踏まえて分析し、その特徴及び問題点を明らかにし、日本語教育における談話教育への提言を行うことを目的とする。

日本語学習者の言語使用を談話分析の観点から研究したものはまだ比較的少ない。そのため日本語学習者との接触場面における様々な問題は、往々にして学習者の言語能力や、個人的な問題として片付けられる傾向がある。接触場面における様々な問題を的確に捉えるためには、生の会話をデータとした実証的な研究が必要である。

本研究は中日接触場面に、会話参加者のそれぞれの母語場面、すなわち中国語母語場面、日本語母語場を加え、三つの場면을対照分析する。まず、中国語母語話者・日本語母語話者それぞれの母語場面の話題転換の特徴を明らかにする。話題転換という切り口から両言語の母語話者の会話のスタイルの特徴に迫る。さらに、これらの結果を踏まえ、接触場面では、参加者本来が持っている話題転換のスタイルが、接触場面の会話にどのように影響するかということについて考察する。中国人学習者の話題転換における母語の影響を検証するだけでなく、接触場面での会話を動的に捉え、参加者それぞれが相手とのやり取りで行っている調整の解明を目指す。そして、これらの結果を踏まえて、異文化間コミュニケーションという広い視野にたち、学習者の母語による会話のスタイルを考慮に入れる重要性など、日本語の会話教育について、提案を行う。

4.2 これまでの研究準備

現時点での準備状況に関しては、中日接触場面と日本語母語場面のデータを収集し、それに関する分析も一部終えている。学会での口頭発表が2本、ポスター発表が1本、学会誌での論文掲載が2本ある。そのほか、話題転換に関する研究を概観するレビュー論文を1本掲載した。以下これまでの研究成果について簡単に述べる。

まず、修士論文では、中国人日本語学習者と日本語母語話者の初対面二者間会話を収集し、話題転換

のプロセスとストラテジーという二つの側面から分析した。話題転換のプロセスについては、話題の導入者だけではなく、話題導入までの参加者双方のやり取りに注目している。話題転換ストラテジーとは先行話題を終了する際もしくは、新規話題を導入する際に用いられる言語表現・非言語行動を指す。分析の結果、話題転換のプロセスにおいて、中国人日本語学習者と日本語母語話者には、異なる傾向が見られた。日本語母語話者は、現在話している話題を、参加者の双方による終了表示を確認してから行うのに対して、中国人学習者は、終了を明示しなかったり、相手の終了が見られないまま、話題導入を行う傾向が見られた。また、転換ストラテジーに関しては、中国人学習者の終了ストラテジーの使用率が比較的低く、開始ストラテジーはある特定の表現に偏するという傾向が見られた(2004a, 2004b, 2005a)。接触場面における話題転換の分析を通して、中国人母語話者の話題転換にその母語の会話のスタイルの影響が推察された。これら接触場면을対象とした研究で得られた知見を踏まえ、日本語教育における談話ストラテジーの教育を、学習者の持つ独自の会話のスタイルを考慮した上で行うことが必要と考えられる。

これと同時に、話題転換研究の動向を正しく把握するために、レビュー論文の執筆に取り組んだ。これまでの話題転換研究の知見を整理し、この分野の研究における今後の課題を洗い出すことは、博士論文の執筆には不可欠である。レビュー論文は、話題転換に見られる言語形式と会話参加者間のやり取りの特徴を中心に、母語場面での話題転換を扱った研究から、異なる母語場面での話題転換を比較する対照研究、日本語学習者が参加する接触場面の話題転換研究まで概観した。その結果、日本語の話題転換研究における量的実証研究の不足や、相互行為的な視点の欠如といった問題点(2006a)を把握することができた。

また、日本語母語場面のデータも収集し、一部分分析を終え、論文にまとめている。日本語母語話者は、話題開始表現を用いて、1.相手が会話の流れをすばやく掴むことができるように配慮をしていること、2.先行話題と関連しない話題の導入にも関連性があるように見せかけること、3.会話をリードすることになる話題導入に対して、不確かさ・躊躇を示し、相手の反応を窺いながら話題導入を行うなどといった特徴が見られた(楊2006b)。

さらに、日本語母語話者は接触場面と母語場面では、話題転換行動にどのような違いが見られるかという課題を解明するために、日本語母語場面と接触場面という二つの場면을比較分析し、口頭発表を行った。接触場面では、日本語母語話者は、非母語話者の相手の理解に配慮し、明示的に話題を提示する表現や話題間の関連性を示す接続表現が母語場面より多く用い、会話の相手に応じて言語調整を行っているということが明らかになった(楊 2005b)。

4.3 本海外調査研究の位置づけ

学習者が参加する異文化間コミュニケーションに見られる問題点を指摘し、学習者への会話教育への提言を行うという博士論文の研究目的を実現するためには、非母語話者の接触場面のデータだけではなく、その母語場面のデータも必要不可欠である。したがって、中国語母語場面の分析及び、中国語母語話者が参加する日本語接触場面と中国語母語場面の比較分析は博士論文にとって重要な部分である。今回収集したデータの分析結果については、現時点では、博士論文の「第4章 中日母語場面における話題転換」及び「第6章 接触場面における中国語母語話者の調整行為」という部分で述べる予定である。また、文献調査の結果の一部は「第2章 先行研究」で述べる予定である。

5. 今後の研究・投稿計画

現在、「中日母語場面の初対面会話における話題導入のプロセスの比較」という題目で8月26、27日に開催される社会言語科学会第18回研究発表大会に応募し、口頭発表として採択された。発表内容については、その後論文としてまとめ、9月下旬に学会誌『社会言語科学』に投稿する予定である。

また、上記のほか、1. 中日母語場面の話題終了のプロセスについて比較分析し、6月下旬に『世界の日本語教育』に投稿する、2. 中国語母語話者の母語場面での話題転換表現の量的分析の結果を中日接触場面と比較してまとめ、9月に『人間文化論叢』（お茶の水女子大学 大学院人間文化研究科）に投稿することを予定している。

6. まとめ

今回の海外調査研究を通して、中国国内でしか入手できない貴重なデータを収集することができ、中

国国内における日本語教育や、談話分析といった分野の研究動向を把握することができた。話題転換を切り口にした本研究のアプローチは、中国語母語話者の会話のスタイルが日本語母語話者と異なることを、直感ではなく、実証的に検証し、両者の違いをより具体的に浮き彫りにするものである。本研究の成果は、日本語教育における会話教育だけではなく、より良い異文化間コミュニケーションの構築にも寄与するものであると考える。

注

- *1. Cは中国語母語話者、Jは日本語母語話者。C・Jの後の数字は会話参加者に付けられた通し番号である。C・Jの前の数字は発話番号である。→は新規話題の開始発話である。主な文字化の規則は下記の通りである。
- h 笑いを示し、hの数は笑いの長さを示す。
- [同時発話を示す。
- () 中の文字は非言語行動を示す。数字は沈黙の秒数を

示す。

- *2. 277J2の発話は相づちであり、272J1、273J2、275J2、276J1の発話は自分また相手の発話へのくり返しである。

参考文献

- 楊虹 (2004a) 「中日接触場面における大転換」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修士論文。
- 楊虹 (2004b) 「中日接触場面における中国語母語話者の話題転換—日本語母語話者との比較から」『2004 年度日本語教育学会春季大会予稿集』 233-238。
- 楊虹 (2005a) 「中日接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して」『言語文化と日本語教育』 31-40。
- 楊虹 (2005b) 「初対面会話における日本語母語話者の話題転換ストラテジー—接触場面と母語場面の比較—」『第 16 回社会言語科学会研究大会予稿集』 66-69。
- 楊虹 (2006a) 「話題転換研究の概観—タイプと方略を中心に—」『第二言語習得・教育の研究最前線—2005 年版—』 159-185。
- 楊虹 (2006b) 「日本語母語場面に見られる話題開始表現」『人間文化論叢』 第 8 巻

やん ほん／お茶の水女子大学大学院 国際日本学
ttn82rd23y@mx8.ttcn.ne.jp

指導教員のコメント

本調査報告は、調査者が中国人と日本人が日本語で会話をするときに生じるコミュニケーションのギャップに関心を持ち、そのギャップが生じる原因を、話題転換に焦点をあてることによって明らかにすることを企図して行った調査の結果を報告したものである。調査者の博士学位申請論文は、中国語母語話者同士、日本語母語話者同士、中国語母語話者日本語学習者・日本語母語話者接触場面の三つの場面の初対面会話を分析の対象とすることを予定している。本調査により、最後に残っていた中国語母語場面のデータが収集された。その分析を終えた後、学位論文の最終的な執筆に取りかかる予定である。

調査者の研究は、ボアズやサピア、ウォーフに端を発する言語人類学の流れをくみ、ことばやコミュニケーションを経験主義的にコンテキストの中で研究するハイムズ(Hymes)やガンパーツ(Gumperz)などのコミュニケーションの民俗誌、さらにはタネン(Tannen)やシフリン(Schiffrin)などの談話分析を研究の枠組みとするものである。これまでのこの分野の研究は英語が中心であり、調査者の研究は、中国語及び日本語というアジアの言語からこの分野へ貢献するものとして期待される。

(国際教育センター 助教授 佐々木 泰子)